

提出日： 2025 年 12 月 4 日

## 研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
国際経営学部	教授	咲川 孝

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。	
	1. 2024年4月 1日 ～ 2025年3月31日	<div>2</div>
	2. 2024年9月 1日 ～ 2025年8月31日	
	3. 2024年4月 1日 ～ 2024年9月20日	
	4. 2024年9月21日 ～ 2025年3月31日	
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。	
	「国の文化と組織文化との関連」が研究課題であった。現地の文化を知る必要があり、ウエールズ語の学習を行い、その習得に努めた。その上で、イギリス、ウエールズの文化の理解に努め、ウエールズ、イングランドの日系企業に訪問、インタビュー調査をする機会があった。また、日本で行った研究、つまり、国の文化と組織文化とのつながりの研究を続け、イギリスで開催をされた学会で報告をする機会を得た。さらに、これまでの一連の研究をまとめて、それを the cultural studies of management として今後、本に出版をする計画である。訪問したカーディフ大学で開催されたワークショップに参加をさせて頂いたり、博士課程の学生と一緒に共同研究を開始した。カーディフ大学は定性的な研究が盛んであり、これまで行った定量研究だけでなく、定性的研究を学ばせて頂いた。	
得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。	
	上記の通り、国の文化の視点と組織文化の視点とを融合をした研究を、the cultural studies of management としてまとめて、出版予定である。研究の途中であるが、ウエールズ、英国にある日系多国籍企業の研究を通して、多国籍企業のなかにおける本社文化、現地文化との対立と融合の枠組みを提示しようとしている。また、方法論的には、日本人マネジャーと現地人マネジャーとの間での視点の微妙な違いがあり、このような異なる見方をもった組織内部の人々の見方を強調した emic approach と、多国籍企業論の組織文化研究との関連を提示できる。	
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。	
	文化における言語の重要性、言語が文化における大きな部分を占めていることを認識した。英国であつても、ウエールズでは古くからウエールズ語が利用されており、企業の現地化には、英語だけでなく、古くから使われている現地語の習得が大事である。ウエールズであろうと他の英語圏であれば、多国籍企業は英語だけでなく、古くから利用されている現地の言葉への理解が、多国籍企業の現地化にとって重要であることを、私の研究の一部として展開できる。さらに、英国、ウエールズの視点と、これまで主に焦点を当ててきた米国の視点の比較、さらに日本をあわせた、これらの 3 つの国の視点の違いを、異文化研究の観点から展開できる。	